

5. 「全体講評」

國松 善次 (財団副理事長)



「つながりと共感で地域共生社会を創る」という大きなテーマで開催された今大会。「健康生きがい」が時代と共に進化しているんだと理解した。前半では地域の課題(悩み)を如何に解決していくかが具体的に示され、示唆に富んだ事例発表で大いに刺激を受けた。いずれにしても、私たちがアドバイザーであることの幸せを感じた。それは、アドバイザーになることによって、「老い」について考える機会を得られたということである。地域活動を通じ自らがモデルとなり示していく。早いか遅いかは別にして、誰もが老いをそして死を迎えるが、どのような状況になろうとも幸せ感を得られるということ。このことを理解して他者や社会に発信(アドバイス)していくことが大切であると感じた。

後半では、「人生100年時代の健康・生きがい新研究会」が取り組むテーマについての中間発表があったが、中でも「女性の社会参加」については、世界に比べて遅れている女性の社会参加を、地域社会ではどのようにすすめたら良いのか。また、「多世代交流」についても、益々重要なテーマとなっており、研究成果の発表を大いに期待している。

この間、コロナフレイルの問題、中でも精神的なフレイルが大きな課題となってきたが、「多世代交流」はその解決の糸口の一つになるのではないかと期待している。また、「ネットによる“つながり”」についても、手段としてICTリテラシーの向上は必須であり、SNSやネットは使わない手はない。仲間内だけに留まらず、地域の方々をサポートする手段としても必要である。いずれにしても、全国のアドバイザーがメンバーとして参画しているこの新研究会は、とても有意義な活動であると理解した。

そして、今日のテーマ「共感」とは響き合うこと。これを「継続」していくことが大切である。まずはアドバイザー自身が、そして協議会が実践していかなくてはならない。

この度の新刊「80代からのいきいきライフ」を読み、まさに「これだ！これだ！」と感じた。言葉を通じ、また書籍を通じ、さまざまな機会を通じて広報していくことが大切である。財団が提唱する理念の発信ツールが増えたことはとても喜ばしい。書籍を教材にした「勉強会」「講演会」「講座」等を通じて現状を打破し、反転攻勢に転じることを期待したい。

世界で誰も経験していない「超高齢社会」。いまだ課題が体系化されていない中で、我々がその課題解決へ向けた仕組みをつくり行動していくこと。「つながりと共感」という、心の響き合いの機会を提供できる仕組みづくりを、我々アドバイザーに求められているんだということを改めて感じた。チャレンジと継続、そして仲間づくり。この課題を、私自身も共有していきたい。お互いこれからも頑張っていきましょう。

6. 「閉会挨拶」

吉田 隆幸 (財団副理事長)



最後まで熱心に参加いただき、ありがとうございました。財団及び協議会発展に向けた2つのプログラムが生まれ、アドバイザーの高齢化がすすむ中で、如何に組織を活性化させていくか、人生100年時代にマッチしたアドバイザー活動の方向性について議論いただいた今年の大会。協議会活性化には、いかに若手アドバイザーを増やし、先輩アドバイザーがどう盛り上げ共に活発に活動していくかが重要であると考えています。そして、若手アドバイザーの活躍には、60代・70代アドバイザーの活躍が重要であると考えている。

会員数増への対策は喫緊の課題で、このことなくしては全国の協議会の運営も厳しい状況にあり、これまでのボランティア活動のみでは運営もままならず、例えば、「ポールウォーキング大会」「成年後見事業」「各種教室・講座開催事業」等の収益事業の導入・構築が求められている。これらの事業を行政との連携・協働で実施する(行政から受託する)事例も見られ、地域住民の方々にとって魅力ある事業を、何とか創り上げ、そして共有していきたいと思っています。今日の発表の中に、多くのヒントと示唆があったのではないかと思います。長時間にわたるご視聴、ありがとうございました。